

- 庄分布の特徴について, 天気, 24, 54-62.
 ———, 1981 a : 500 mb 高度の平年値について,
 研究時報, 33, 211-215.
 ———, 1981 b : 500 mb 高度の持続性と精度に
 ついて, 研究時報, (投稿中)
 藤田敏夫, 1964 : 周期性と持続性, 気象研究ノート,
 15, 347-360.
 久保木光熙, 平沼洋司, 1981 : 1か月予報の総観的

- 方法, 1か月予報指針, 気象庁, p 104.
 高橋浩一郎, 1963 : 気象要素の時系列の統計的諸性
 質, 研究時報, 15, 611-621.
 和田英夫, 1971 : 長期予報の歴史的展望, 季節予報
 指針上巻, 気象庁, p 13.
 渡辺次雄, 1955 : 極東域 700 mb 半旬偏差図の持続
 性について, 研究時報, 7, 238-241.



朝倉 正 著

異常気象に備える

—全天候型産業のすすめ—

日経新書 (日本経済新聞社),
 昭和56年, 115×175mm, 219頁

気候——この言葉は現代の流行語のように見える。およそ流行とは短かい間にすぐすたれてゆくと、一般的にはいえる。しかし、それは多くの人が軽率にとりあげるからいけないのであって、真剣に考えると、人々が問題にするテーマは、それだけの理由があって問題となっているであろうとも言える。気候は近代の科学 (とくに地球環境など) の到達した最終テーマに近く位置している。また多くの方面に密接に関わり合う総合巨大科学の1つである。すなわち、宇宙、エネルギー、資源、海洋、生命科学などと肩をならべ、またその多岐にわたる点では、それら以上の評価もうけうる総合的的巨大科学となりつつある。

さて、総合とは単なる統合とは異った方向をもっている。それには ① 1つの目的のもと、有機的な構成体をなしていること、② priority (優先度) を考えるべき位置づけがはっきりしていること、③ 未知領域への開発を含めて、柔軟性に富んでいることなどがそれであろう。またこれらのことをふまえたところの専門家と同時に、方向づけの出来た人の存在が重要になってくる。

本書は異常気象という耳なれた標題に対して幅広く書き下した力作であり、著者はまさにこのテーマの適任のスペシャリストである。

この本の内容は次の目次により示される。

I. ふえる異常気象

ごく最近の異常気象の実例を掲げつつ、診断、変動、そして気候の歴史が要点について簡潔に述べられている。

II. 異常気象の原因と今後の気候予測

異常気象の原因論は書き出したら限らないが、ここではその大観を要領よくまとめ、予測についてもその考え方のエッセンスをまとめている。

III. 日本の気候の特徴

3つの「なぜ」を中心に、著者の専門のモンスーン気候などを解説している。日本の立つ自然環境の特異性をよく知ることができる。

IV. 異常気象と食糧、エネルギー

このあたりは最も up-to-date な課題であり、その複雑なインパクト (影響) を多くの人は知りたがっているので、良きガイドになるだろう。

V. 商品と異常気象対策

非常に具体的に日常的な社会生活への関係が述べられていて、卑近なものとして異常気象をとらえることが出来る。とくに終りの方に述べられてある全天候型思考のすすめ、すなわち天気の情報積極的に活用する方法など、今後もますます方策が考えられるテーマであろう。

以上のように、この複雑な課題を要領よくこなした書下しの本で、新鮮さを十分感じる良い本であり、目下大きな抱負をもち、気象庁の気候変動対策業務の中において活躍されている著者の近著として、座右に備えておかれることをお薦めする。

(内田英治)